

絆 求 め て

9月27日発行

文責 幼児教育専門員 久保田学

**現職教員研修①を実施しました！**

令和6年8月31日(土)、武庫川女子大学教授 倉石 哲也先生、飯田市立上村小学校長 中原 功博先生を講師としてお迎えし、現職教員研修①をWEBで実施しました。倉石先生には「子どもの権利と不適切な保育を考える ～発達保障の観点を含めて～」、中原先生には「園小接続の現状と今後の対応 ～今改めて考える、「園・小接続」とは何か～」について、ご講義いただきました。以下に研修後のレポートでお書きいただいた内容を紹介いたします。

<倉石先生の講義から学んだこと>

- 不適切な保育を考えるという内容の研修を受けさせて頂き学んだことが大きくわけて3つありました。1つ目は子ども達に子どもの権利をどのように伝えるかということです。難しい言葉ではなく、分かりやすく「やってもらいたいこと、やってほしくないことを伝えていいんだよ」などと伝えていくことも大切だと学びました。自分の意見を表明することはやってもいいこと、これは日々の保育でも伝えていくことができるなど感じました。2つ目は保育を語り合ったり相談し合ったりする時間をもち、保育者間がゆとり、余裕を持って保育に当たっていくことの大切さを改めて感じました。その日の子どもの姿を語り合ったり、保育の内容を振り返ったりすることで子どもの姿が共有され、保育者自身も心に余裕を持つことが出来ると思いました。3つ目はできない時、失敗した時にこそ支えが必要だということです。自立の中にも自分でできるようになることの他に人に頼れるようになるということもあると教えていただきました。大人になってもできないこと、苦手なことはあるし、できないことを助けて欲しいと頼ることも大切だと学びました。
- 子どもにとっての遊びの重要性、すべての子どもに安全で安心して過ごせる場所が多くあることが重要であることを学びました。こども誰でも通園制度では保育園などに入っていない子どものいる家庭の背景に低所得という課題があることを知り、どんな子ども達でも安心して過ごせる環境づくりが求められていると強く感じました。また子ども達が失敗しても守られる、助けを求めることのできる環境が大切だとわかりました。できなくても大丈夫、周りの大人が助けてくれると子ども達が思うことができる、自立にもつながるという事もわかりました。比較=差別という言葉はハッとしました。できる、できないで子どもをみないようにはしていましたが、子ども達を比較してしまうところはあったなと反省しました。子ども達にどう思われているかという視点も必要だということが心に残っています。今まであまり意識してこなかった視点でした。

<倉石先生の講義から今後の保育実践に生かしたいこと>

- 集団生活を行う園生活の中で、一人ひとりに丁寧に目を向け、その子にあった能力を十分伸ばしてあげたいと思った。一人の人間として人権を尊重し、その子の好きな事、得意な事、苦手な事や伸ばしてあげたいことを丁寧に考え、どの子も応援していると思えるように子どもと接していきたいと思った。それには、集団生活だからと他の子と比べたり、自分の経験値だけで保育内容を設定せず、様々な視点から子どもをみてより良い保育内容を考えたりすることが必要だと思う。また、定期的にセルフチェックリストを職員全体で確認することや、職員同士での意見交換を日常的に行い、虐待や不適切な保育にならないようしていきたい。
- 愛着形成が、これからの時代とても重要視されていることを改めて感じました。…そのために、子どもたちの個々の育ちに寄り添い、周りとは必要以上に比べる事のないように、園全体で、子どもたちを見守り、その子たちのいいところ探しをし、職員室で語り合えるよう時間を作りたいなと思いました。また、クラス担任だけでなくその他の職員も、その子の良いところを保護者にお伝えし、お家の方ともその子の良いところを共有し、みんなで一存在を大切に認め育てていきたいとおもいました。

<中原先生の講義から学んだこと>

- 講師の中原先生が「目の前にいる子どもをどれだけ認められるかが大切で、幼児教育から学ぶべきことがたくさんある」と話された事が印象的でした。また、幼稚園、保育園で培ってきた子どもたちの学びが、小学校でどう生かされていくのかが現在の課題なのだと感じました。「1年生はゼロからのスタートではない」とは幼児期に園で培った子どもの力を小学校で大切にし、更に子どもの能力を引き出していくために子どもの主体性を受け入れる学校にならなければならないこと。指示されたことに従う教育方針ではなく、園での「遊び」から学んだ考える力を活かせる学校づくりをしていくことが大切なことなのだと学びました。教えてもらう受動的な学びから子どもたちの声を大切に尊重しながら、探究心を鍛えてワクワクしながら学んでいく探究的学びが実現できるように、今後も幼保小の連携・接続に力を入れていかなければいけないのだと改めて感じました。
- 保育現場では子どもの主体性を大切にしているが、「主体的な子どもが育つと、小学校の先生方は困る」というギャップがあることを知った。しかし、子どもの主体性を受け入れる学校にしようと山間地や小規模校、特認校など多様性を認める小学校があることを知り、職員確保の問題もあるが、そのような学校が増えてほしいと思った。自由進度学習として、一人一人にあった自分のペースで進める学習を取り入れている小学校があり、この一人一人に合った学びである「個別最適な学び」は園の個別支援と同じことではないかと思いました。
- 不登校が年々増えていることに、子どもたちが生きづらさを抱えていると知った。学校生活は揃えることが多い。また、点数で比較されることもある。いつの間にか自分を出さないように、自分の勝手にやっただけはいけないことを学んでいく。幼児期は遊びからたくさんを学んでいく。小学校でもそのような環境であるといいと思った。その中で上村小学校の「揃えるからの脱却」の話が印象的だった。本来持っている子ども達の探究心や好奇心を最大限に出せる環境であると感じた。子どもは何歳になっても好奇心や探究心がある。園小接続を考えるにはまず交流し、幼児期の自ら学ぶ姿を知ってもらい、小学校も同じ考えで子どもの育ちを見守っていただけるよう、関わりを強めていけたらと思った。

<中原先生の講義から今後の保育実践に生かしたいこと>

- 年々、学校に行きづらい子どもたちが増えてきている。学校側は児童や家庭に要因があると考えている。一方で、保護者側は学校文化に問題があると考えていて両者の間に違いが生じている。園では自由にのびのび自分で考える、ということを大切にしている先生が多いが、小学校ではみんなと一緒に揃えると言った同調圧力が働きがちである。しかし近年では、同調性ではなく、得意な所・良いところを伸ばそうと小学校でも伸長ということが言われ、教師が答えを導き出し、学習内容を習得できるようにするのではなく、子どもたち自身が問いを見つけ探究する力を育てることが大切にされてきている。園でも小学校でも、その子がやりたいことをやりたい時にやりたい方法でという、主体的・対話的で深い学びが出来ていけば、園小接続になる。この事を今後の保育で実践し、小学校につなげたいと思う。
- 幼稚園生活を終えて子どもたちが卒園すると、なかなか小学校に行ってから様子が変わらなかつたり、子どもたちが進学してから悩んでいることや困っていることを実際に知ることは難しかったりする。幼稚園側も小学校側も互いに歩み寄って現状を共有する場を作っていけたらいいなと感じた。学校での取り組みと幼稚園での育ちや保育をする上で大切にしていることなどを互いに話し合いながら、子どもたちのより良い育ちのために私たちが協力してできることを考えていきたいと感じた。幼稚園と小学校とで繋がる機会を大切に作っていききたいと思う。

今回の研修に関わる感想に次のような事を書いていただいた先生がいました。紹介します。「今日のような講演を、ぜひ幼稚園・保育園や小学校・中学校の先生方にたくさん聞いていただける機会があるといいなと思いました。そして、伊那小学校や上村小学校のような学校が、公立で当たり前になるといいなと、強く感じました。」

私は幼児教育専門員という立場で、様々な園を訪問させていただく機会があります。しかし、小学校や中学校に行く機会はありません。また、今回のような研修に小学校の先生方に参加いただくこともありません。お互いが一堂に介する機会は中々持てないという現状があります。しかし、それだけに中原先生の言われる、「主体的な学びの継続」が大切な接続になると感じました。ぜひ、幼児教育の根幹となる、子どもの主体的な学びのための支援をこれからも大切に、実践していきましょう。(専門員)